

なぜ彼は二度立ち止まったのか

—ラカンの「論理的時間」の読解の試み—

伊藤 正博

はじめに

1945年、復刊された『芸術手帳 (Les Cahiers d'Art)』誌の特別号にジャック・ラカンは「論理的時間と先取りされた確信についての断言 (Le temps logique et l'assertion de certitude anticipée)」と題する論考を寄稿した⁽¹⁾。この論考の冒頭にはおおむね以下のような内容の寓話が掲げられている。

刑務所長が三人の囚人を呼び出し、五枚 (うち三枚は白で二枚は黒) の円盤を見せて、「この内の一枚を各人の背中に貼る。自分の円盤の色がどちらか、最も早く、かつ正当な推論によって言い当てた者を釈放する」と言う。そして所長は全員に白い円盤を貼る。

三人はしばらく互いを観察しあったのち、同時に所長の前に進み出る。そして次のような同様の論拠を述べる。すなわち「わたしは白だ。もしわたしが黒だったなら、あとの二人は『もしわたしも黒だったなら、残る一人は即座に自分は白だと分かるはずだから、すぐに出て行ったはずだ。しかし彼は動こうとしない。だからわたしは黒ではない』と推論できたはずだ。そして二人とも自分が白だと確信して出て行っただろう。ところが二人はいつまで経っても動こうとはしなかった。それはわたしが黒ではないからだ」と。

この寓話が作られたのはラカンの構造論的な精神分析理論の構築に踏み出す以前のことである。しかし三十年以上にわたる彼の「セミネール」には、そこかしこに、あたかも彼の理論的発展の道標のようにこの寓話への参照が見られる⁽²⁾。

ラカンはその最晩年に至るまでこの寓話に言及し続けた。そのことから、この寓話には彼の初期からの一貫した問題意識を導く「教訓」が織り込まれていることが窺われる。以下では論理と時間との関係の問題を中心にしてその一端を読み解くことを試みる。

1 「三人の囚人」の寓話の特徴

まず、設定のよく似た他のいくつかの寓話との異同を確認して、この寓話の特徴をはっきりさせておこう。

(1) 「三人の囚人」の寓話は、鏡像的な同型性をもつ諸主体の葛藤から出発して法の審級を代表する超越的な第三者の登場を語る他の寓話たちと類似している。たとえばホプズの『リヴァイアサン』に見られる社会契約による主権者の選出を語る寓話や、マルクスの『資本論』に見られる商品世界から貨幣を導出するいわゆる「価値形態論」がそれである⁽³⁾。後に見るように「三人の囚人」の寓話にあっても法の審級としての自我理想の形成が語られている。けれどもラカンの寓話は、三人の中から誰か一人を例外者として出現させるわけではないという点でホプズやマルクスの寓話とは異なっている。

(2) 「三人の囚人」の寓話は起源の神話一般に見られる循環論法を含んでいるという点では他の寓話たちと同様である。ホプズやマルクスの寓話において最初に立てられる個人や商品は、すでに実現している社会から抜き取られたサンプルである。それらは実は、結論として導き出される国家や資本の存在を前提として初めて成り立つものでしかない。「三人の

囚人」の寓話の場合も、導き出されるべき自我理想は出発点においてすでに前提されている。

起源の神話は循環論法を通して隠れた前提を前景に引き出すことしかしない。そこで問題はどのような隠れた前提を引き出すかということになるが、ラカンはホップズやマルクスとは異なるところに目を向けている。すなわち、双対的な関係の内にある主体たちの中から超越的な第三者を演繹的に導出するような論理はないので、ホップズやマルクスは場面転換によってこの問題を飛び越え、すでに超越的な例外者が出現した場面へと話を進める。これに対してラカンは、むしろホップズやマルクスが飛び越えた「論理の行き詰まり」に焦点を合わせて彼の寓話を作っている。この寓話は、いわば一つのパラダイムの「うしろ暗い過去」を暴き立てることを狙いとしているのである。

(3) 一般に寓話や神話はさまざまな異なる水準、領域へのアナロジーを誘う。たとえばマルクスの「価値形態論」はホップズの社会契約の寓話における人間を商品に置きかえたパロディになっている。そして、「一つのシニフィアンは他のシニフィアンに対して主体を代表する」というラカンのテーゼは、「価値形態論」における商品をシニフィアンに置きかえたパロディになっている。寓話や神話には、次元を異にする諸領域へと同一のロジックを押し広げて行く力が潜んでいる。あるいは、次元を異にする諸領域を共通のロジックで裁断して一対一の対応関係を出現させることを通してその意味作用を生み出す、と言った方がよいかもしれない。つまりシニフィアンの働きの基本的性質が、一つの神話、一つの寓話といった単位においても見出されるのである。それは、たとえばファシズムの言説のように国家や資本を身体へと短絡的に繋ぐ諸表象を生み出すようなこともするが、ときには他の仕方では近づき難いホモロジを明るみに出してくれることもある。

「三人の囚人」の寓話も、より規模の大きな社会集団の次元へとアナロジーを推し進めることができる。この寓話の中に集団形成の力学を読み込む試みは既にいくつか見られるし、またラカン自身も「論理的時間」の論考の中でそうした解釈への示唆を与えてもいる。けれども以下ではこの寓話の「教訓

のミクロの部分に光を当てたい。そのようにしてはじめて、ラカンがその論考のタイトルに掲げている「論理」と「時間」との関係の問題が前景に立ち現れてくるからである。

そのために本稿ではカントが『純粹理性批判』で試みた超越論的演繹と照らし合わせてこの寓話を読み解く試みを行う。超越論的演繹はそれ自体、始まりの神話の構造をもっている。それは構想力による感性的多様の通覧から出発して対象認識の過程を辿りなおす試みであるが、その構成要件として組み合わされる認識諸能力のアプリオリな働きはいずれも、すでに構成された経験の中で相互に前提しあって働いているかぎりでのそれではない⁽⁴⁾。だからそれらの認識能力の働きのいずれが先かは「ニワトリとタマゴ」の堂々巡りの関係になる。そして同じことが三批判書の相互の関係についても言える。そうした事情は、あちこちに散らばった議論の内から「論理的時間」に関わるものを取り集めて一つの文脈を浮かび上がらせることを可能にしてくれる。それを利用して、本稿では、いわば縮尺を揃えるような仕方ですべての「三人の囚人」の寓話をカントの議論と比較することを試みる。

2 囚人たちの推論

この寓話を巡る論考のなかでラカンは囚人たちの思考過程を「眼差しの瞬間 (l'instant du regard)」「理解の時間 (le temps pour comprendre)」「結論の時 (le moment de conclure)」の三つに分けて、おおよそ以下のような説明を与えている⁽⁵⁾。

「眼差しの瞬間」は他の囚人たちの背中に二枚の円盤を認める一瞬の間のことで、このとき主体は非人称的 (impersonel) な仕方ですべての白い円盤を見ているとされる。この段階ではまだ、認識主体とその対象との一般的な関係があるだけで、他の囚人たちは思考する主体として登場していない。ただしすでに推論は始まっているので、より正確に言えばそれは、自分の背中に貼られているのは残った二枚の黒と一枚の白の内のどれかだということを主体が確認するまでの

短い時間だと言った方がよいかもしれない。

つぎの「理解の時間」から他の囚人の立場に視点を移動させた推論が始まる。推論は「もし自分の背中の中が黒だったら」という仮定から出発し、「他の二人はそのうち、相手が動かないことから自分は白だと気づくだろう」「しかし二人ともいっように動く気配をみせない」と続く。ここでは主体は同類たちとの相互性(réciprocité)の内にあると言われる。

最後の「結論の時」には二度の中断が含まれている。まず、他の囚人に先んじて結論を下さなければならないという切迫感に駆られて、主体は自分の背中の中が白だという結論に飛びつく。しかしこの結論はむしろ賭けにうって出る決断といったほうがよいものである。というのも、先の推論の中の「そのうち」とか「いっように」といった時間の量り方は主観的な評価にすぎず、正確な客観的尺度に基づいているわけではないから、他の二人が先に動き出した場合、主体は、彼らが自分の背中に黒を見て結論を下したのか、それとも自分と同様の推論を経て「三人とも白だ」という結論を下したのか、どちらの結論を下して動き出したのかを決定できなくなってしまうからである。「推論の前提が失われる前に結論を出してしまわなければ」というのは本末転倒した考え方である。しかしそれ以外にはいかなる手立てもないとなれば、そこにはバスカルの賭けの理論に似たある種の論理的妥当性が認められる。そういう仕方でもかく、ここでは他者たちとの相互的な関係性から抜け出して自己の固有性を打ち立てようとする行為(acte)の主体が現れると言われる。

するとここに新たな状況が出現する。主体が結論を下して行動に移るとき、同時に他の囚人たちも行動に移る。そのことは推論にとって「…しかし誰も動こうとしない」という前提が失われたことを、したがって結論へと主体を導いた推論の足場が崩れ去ったことを意味する。ここで主体は一旦立ち止まって推論を組み立て直さざるを得ない。やり直しの推論には他の囚人たちも自分と同時に立ち止まったという条件が加わる。そして「もし自分の背中が黒だったならば他の二人は立ち止まらなかったはずだ」という結論を得て、主体は再び行動に移る。

ところがここでもまた、同時に他の囚人たちも行動に移る。つまり「他の二人も立ち止まっている」という前提が失われる。しかし今度の場合は、他の二人が再び行動に移ったとしても「彼らが一旦立ち止まった」という事実が消えずに残る以上、結論を変更する必要はない。前提の消失は他の囚人たちも自分と同じ結論に達し自分と同じ行動に出たということの意味する。そのことを確認して、三人は同時に最終的な結論に到達する。

おおよそ以上のような説明をラカンとは与えている。その中でまず目に付くのは「眼差しの瞬間」の説明のところで「非人称的」な知覚という現象学的な言い回しが現れることである。ここから当時のラカンがまだ現象学の影響圏内にあったと見る向きもあるかもしれない。けれどもこの寓話の性質からして少なくとも彼が現象学に満足していないことは明らかである。なぜなら「眼差しの瞬間」の内に識別不可能なほど小さく折り畳まれている時間的諸契機を「理解の時間」「結論の時」が次々と展開していくというふうはこの寓話は作られており、それはそのまま現象学が気づかずに前提している時間的諸契機を明るみに出す過程にもなっているからである。もう少し具体的にいえば、この寓話ではメルロ＝ポンティが斥ける「上空飛行的思考」⁽⁶⁾やサルトルが斥ける「神の視点」⁽⁷⁾が実はある仕方でもパースペクティブ的な知覚にとって、それを構成する象徴的な支えとして機能しているということが明らかにされる。そして、この象徴的な支えの設立に関わる時間的諸契機を囚人たちの振る舞いという目に見えるかたちに託して繰り広げることが、この寓話の狙いの一つとなっているのである。以下に章を改めてその詳細を検討しよう。

3 主体 / 主語の入れ替え

まず「理解の時間」に見られる次々と視点を交替させて推論を進めるプロセスを検討しよう。ラカンは『盗まれた手紙』のセミネール⁽⁸⁾の中で、手紙の持ち主の交替にとまらぬ登場人物たちの関係の交替が「三人の囚人の寓話」と同じことを

語っていると指摘している。ポオの小説『盗まれた手紙』では、手紙を盗む者、盗まれる者、そこに居合わせているけれども何も気づかない者という三者の関係が、芝居の配役をずらすような格好で再現される。三人の囚人も、それぞれの想像の中で他の主体の視点を遍歴する。

ラカンがここで指摘しているのは、主体の位置を次々に移動させるという両者に共通して見られる進行のうちに、言語活動がその本性からして主体をそこへ誘い込む、主語の入れ替えという操作が示されているということだろう。言語活動はこうした主体/主語の置き換えによって開かれる「空間」をその活動領域としている。この入れ替えができてはじめて人は言語を習得したことになると言ってもよい。1950年代にはラカンはおもに、大文字の他者の欲望というかたちでその効果が主体に到来するという側面から、この主語の入れ替えの問題を取り上げている。しかしこの寓話では、小文字の他者たち、つまり同類の者たちどうしの間での主語の入れ替えが問題となっている。それは人類学の領野における「贈与の体系」とか「親族構造」という主題と共通する水準での問題の立て方である。

「三人の囚人」にあつては主語の入れ替えは視点の入れ替えと合致する。その場合、三人のうちの誰の位置に視点をもつてもそのつど当人の背中が見えなくなる。つまり、そのつど見えない部分が一つ付きまとうことになる。ところが上に見たような帰謬法的な推論を通して自分の背中の中は白だという結論へと主体が到達したとき、主体は三人の背中が同時に見える想像上の視野を獲得する。ここに現れてくるのは、視覚的知覚に付きまとう不可視の部分の欠いた、誰の視点を原点とするパースペクティブにも制約されない、その意味において「客観的な」空間表象である。三人の背中が同時に見えるという点で、それは三人の背中に円盤を張り付けた刑務所長の視野と重なるものでもあるが、しかし単純にそこに還元されるようなものではない。

ラカンは1972年のセミナーで、いわゆる第四文型(SVOO)の文の各項目を頂点とする四面体についてあれこれと考えている。そして、この四つ組(tetrad)の構造がなければ空間知覚もありえないだろうと言っている⁽⁹⁾。ここで考え

られているのはカントにおける「図式(Schema)」に近いものである。たとえば数学的に四面体を考えるときに、わたしたちは主観的なパースペクティブを超えた、どのような具体的な視覚的知覚とも異なる一つの立体を考えている。ラカンが考えている第四文型がもたらす位置関係のモデルはこの数学的直観に近いものである。それは具体的な知覚の積み重ねを通して経験的に獲得される直観ではなく、およそ空間知覚というものが成り立つために必要とされる超越論的な配置である。

ここで問題になるのは、主語の入れ替えを通して動詞の位置に何が見出されるかということである。動詞は主語や目的語の位置に置き入れられる実詞たちの相互関係を規定している。実詞たちが相互に交換可能であるのは、それらが動詞との関係をもつかぎりにおいてである。数学的な喩えを使えば、動詞は関数 $f(x,y)$ に相当し、実詞たちは変数 x,y に相当する。しかしその一方で、文を形成する語の連鎖の中では動詞は一つの語として実詞たちと横並びになっている。ここでは動詞と他の実詞たちとの違いが見えない。

文の中に動詞が位置しているさまは、貨幣が一商品として他の商品たちの間にあるありさま、あるいは、イエスが一人の人間として他の人間たちの間にいるありさまと類比的である。それは、この文法構造が一つの対象領域を組織する仕組みとして機能していることを物語っている。主体はここでカント的な意味での一つの「数学的」な空間を構成し、見えないはずの自分の背中を見ている視点なき眼差しを獲得する。なるほどそれは刑務所長の眼差しという具体的なイメージと重ね合されもする。けれどもそれはその本質において具体的、個別的な視点を超えた眼差しである。あらかじめ象徴的な水準においてそのような「位置を超えた位置」が確保されていなければ、具体的なイメージをそこに充填することもできない。寓話が明らかにするのは、そのような象徴的な位置が設立されるのは、言語活動の基本的要請でもある主語の置き換えを通してである、という事情である。

精神分析理論の観点から言えば、ここに現れる視点なき眼差しは自我理想である。それは、世界を見下ろすとともに、その世界の中に一物体として主体自身を位置づけもする眼差しで

ある。そのような眼差しのもとに主体と対象とが並置され、互いに区別されることによって、はじめて通常の知覚も可能になる。さもなければ『嘔吐』⁽¹⁰⁾のロカンタンのように、主体は対象に飲み込まれてしまう危機に常にさらされることになるだろう⁽¹¹⁾。

ただし、ここに現れているのは似姿どうしの葛藤から主体を救い出してくれる自我理想の好意的な側面だけである。ここではまだ自我理想は、他者をも等しく支配するという意味での普遍的な法として機能しているわけではない。そのことは「三人の囚人」の寓話の場合、最初の結論が脆弱なものでしかないということの意味している。単純化して $A=B$ 、 $B=C$ 、 $C=D$ …ゆえに $A=n$ という推論を例にとりて説明しよう。ここでは $A=B$ は推論がどこまで進んでも不変の前提として保存される。 A から目を離して $B=C$ 以降へと推論を進めている間に、いつの間にか A が $A=B$ ではなくなっているかもしれない、ということは考えられていない。論理的でない数学的な推論にあっては、前提はけって古びない。その意味で、それらの推論は時間を排除したところで成立している。「三人の囚人」の場合も、推論の時間の経過にともなう生じる前提の変化の可能性が捨象されて、はじめて三人を同時に見下ろす視線が獲得されるにすぎない。だからそのような想像上の視線が得られたからといって、主体がみずからの背中を直接見ることができないという基本的状況が乗り越えられたわけではない。

実際、主体が行為の次元に入るやいなや、最初の結論がその内でもたらされたこの調和的な世界は崩れ去る。刑務所長に結論を伝えるために進み出た途端に、主体は自分と同時に他の主体たちも動き始めたことに気づいて立ち止まらざるをえない。この停止を語ることによって「三人の囚人」の寓話は論理と時間との関係についてどのようなことを教えているのだろうか。この停止が二度訪れることをラカンが強調しているが、それはなぜか。この寓話とカントの超越論的演繹との間に対応関係があるとすれば、「結論の時」をよぎる二度の停止は、直観的表象を悟性概念の下に包摂するプロセスに二つの切れ目が刻まれていることを示唆しているということになる。以下に節を改めてそのことを確かめよう。

4 因果性をめぐるカントの議論との比較

カントは『純粹理性批判』において単に認識の形式的諸条件だけを問う一般論理学を退け、認識の可能性の条件をその源泉をなす認識諸能力の働きに遡って問う超越論的論理学を提示する。彼はそこに産出的構想力のもつアприオリな時間的性格を見出す。構想力による「時間化」を媒介にしてカテゴリーは現象に適用される。喩えていえば、形式論理学が目に見える現在の地形を分類する地理学であるとするれば、超越論的論理学はそこに地殻変動や浸食といった変化の時間を読み取る地質学に相当する。カントは、形式論理学にあっては排除されている「論理が形成される時間」の問題の蓋を開けたとてよい。しかし肝腎なところでこの「論理的時間」の問題はいわば抑圧されている。以下に詳しく見てみよう。

超越論的演繹では、構想力は一連の感性的表象を継起的に把捉して一つの直観的表象へと総括するとされる。けれどもこの構想力自身がその内で活動することを通して開示する時間は、そうした活動の結果として認識される実在的な対象がその内に位置づけられる時間とは異なっている。「原則論」で、カントは一軒の家を見る場合を例に挙げている⁽¹²⁾。わたしがその家をどこから見始め、どこで見終わって、「しかしかの家がある」という判断に到着したかということ、この判断にとって、そして家自体にとって、どうでもよいことである。二階から見始めようが、一階から見始めようが、結局同じ認識がもたらされる。そして実在的な対象としての家は、構想力による通覧の順序とは関わりなく、因果性のカテゴリーのもとで客観的な諸現象の継起のうちに位置づけられる。構想力の活動がその内にある時間と因果性のカテゴリーのもとにある諸現象の属する時間との間にあるのは、単純に包摂 (Subsumtion) と言って済ませられるような関連ではない。しかしカントはこれら二つの時間がどのように関連しているかについて『純粹理性批判』では立ち入った考察をしていない。

けれども引き続き実践理性の批判の仕事の中で、この問題は、義務と傾向性との対立、自由と必然との対立という姿をとっ

て前景に現れてくる。すなわち、自由意志から出発する目的論的な因果性と自然科学的、機械的な因果性という二種類の因果性の懸隔、齟齬がここで顕在化する。実践の領域に現れる二種類の因果性の不調和の問題は、理論的認識の領域で抑圧されたものが別の形をとって回帰したものと見なすことができる⁽¹³⁾。

認識理論のほうに目を戻すと、超越論的演繹は対象認識という目的に向かう認識諸能力の協働のありさまを再構成する試みだから、当然、そこでは自然科学的な因果性よりも目的論的な因果性に親和的な説明がなされる。そこに見出されるのは根本的には実践的な関心を通して開示される時間である。そのような時間が、機械的必然性の支配する時間にいわば席を譲って引き下がることによって、実在の対象の認識は成立する。なぜ、どのようにして、この交替は行われるのだろうか。

『純粹理性批判』では隠されているこの問題への手がかりを与えてくれるのが『判断力批判』に見られる崇高なもの (das Erhabene) の分析である。ここでは無限に大きな対象や計り知れない自然の威力を前にして構想力の総合作用が破綻するという事態が考察されている。このとき構想力はその不適合それ自体を通して理念を表出すると言われる⁽¹⁴⁾。ここで表出 (Darstellung) と呼ばれている働きは、「美的分析論」に見られる美的理念 (ästhetische Idee) の働きと類比的な関係にある。美的理念は次のように形成される。すなわち、美しい対象に向かい合うとき、構想力が提示する感性的表象を悟性は規定された概念のもとに包摂することができない。このときの感性的表象への悟性の到達不可能性が、理念への悟性の到達不可能性と類比的であることから、その感性的表象と理念とが結び付けられる。この結びつきをカントは象徴 (Symbol) と呼び、そのようにして理念を象徴する感性的表象を美的理念と呼ぶ⁽¹⁵⁾。崇高なものの場合には、同様のアナロジーによって構想力の挫折それ自体が理念と象徴的に結び付けられる。すなわち「表象することができない」という状態それ自体が、理念の感性的表出とみなされるわけである。

『純粹理性批判』で論じられる実在的な対象の認識にあっても、「崇高」の場合と同じように何らかの仕方で構想力の挫

折と理念への訴えとが介在していることが推察される。すなわち、構想力が感性的多様を継起的に把握する主観的な時間は、自然科学的な因果関係を紡ぐ客観的な時間と直接出会うのではなく、その前にまず、ある「表象不可能なもの」に出会う。それは、構想力が感性的多様の通覧に費やす「時間」とともに生じる状況の変化である。すなわち、構想力はみずからをその内に置くことを通してこの時間の次元を開くのだが、そのことは必然的に構想力がみずからの認識対象にかまけている間にそれ以外の一切を取り逃がすという結果を生み出す。認識主体はこの取り逃がされたものに事後的に直面せざるをえない。そのときこの状況に相応しい一般者を求める反省的判断力が働き、構想力が取り逃がしたものも含めて普遍的に妥当する時間的秩序としての因果の系列という理念に訴えて危機を回避する⁽¹⁶⁾。ラカンの分析理論に即していえば、因果性のカテゴリーは、いわば現実界 (le réel) に対するバリアとして呼び出されるのである。

そういうわけで、因果性のカテゴリーが構想力の表象を「包摂」するまでには、認識主体の「表象不可能なもの」との出会い、この「表象不可能なもの」と理念との結びつけ、という二つの時間的契機が介在する。それらの契機は『純粹理性批判』では識別不可能なほど小さく折り畳まれており、ただ、経験の類推に関与する諸カテゴリーは統制的原則しか与えないという指摘にそのかすかな示唆を見出せるにすぎない⁽¹⁷⁾。『判断力批判』におけるカテゴリーの拡大適用を待ってはじめて、その機序が明らかになるのである。

さて、それでは再び「三人の囚人」の寓話に戻って、「結論の時」を区切る二度の停止の意味を考えてみよう。一度目の停止はカントの崇高論に見られる「表象不可能なもの」との構想力の出会いと対応すると考えられる。せつかくたどり着いた結論の前提を覆す新たな事態に主体が直面したとき、「理解の時間」から連続する思考の流れが突然断ち切られる。ここで主体は、みずからの思考の中で推察した他者の思考とは異なる仕方で、知らないうちに他者の側で思考が進められていたことに気づかされる。この不意を衝くような事態の襲来の仕方は「崇高なもの」と類比的である。一度目の停止は現実界

が顔を覗かせることによってもたらされる。

では二度目の停止は何に対応するのか。もちろんそれは、構想力によって主観的な時間的秩序の内を通覧された諸表象を自然因果性の秩序の内へと引き渡すことに対応している、ということになるが、対応関係は少し込み入ってくる。それというのも『純粹理性批判』では理論的な対象認識のみが問題とされているのに対して、「三人の囚人」の場合には主体のあり方に関わる認識が問題になっているからである。そのため「三人の囚人」の寓話にあっては、話が実践的な領域へと広がる。すなわち、第二の停止において主体はみずからの最初の推論の正しさを再確認するが、それとともに自我理想の「法」としての側面がここに現れてくると考えられる。この法の下で主体は自分を人間たちの一員とみなし、誰もがそれに従属している一つの共通の時間という意味での「客観的」な時間の内に自己を置く。そのことは主体にとって、個体としてのみずからの始まりと終わりを越えて伸びる時間の中に自己を位置づけるということの意味する。つまり主体はみずからの有限性を、すなわち自分の存在がその誕生と死という境界によって区切られているという規定性を、引き受けることになる。カントの議論との対応関係に目を向けるならば、主体がこの有限性を引き受けることによって、「第一原因」や「魂の不死」といった理念が、単なる理論的認識に関わる問題であることを越えて、主体の実存にかかわる問題として現れてくることになる。実際、カントにあっても理念はもともと実践理性の要請 (Postulat) として呼び出されたものであり、主体の有限性をファンタスムの内に回収することをその本来の役目とするものである。ラカンの囚人たちは、他の二人も自分と同じ結論を下したのだと再確認するや、後れを取るまいとして大急ぎで「死すべき者」の一員であることを引き受けるのだが、それは期せずして現実界に蓋をすることと一体になっている。

以上のように、論理と時間との関係に即してラカンの「三人の囚人」の寓話とカントの超越論的演繹とを比較すると、両者のあいだには対応関係が少なからず認められること、そして、この寓話が超越論的演繹では極小化されている時間的契機、すなわち反省的判断力という蝶番の介在によってのみそ

れと知られる時間的契機を拡大して示していることがわかる。精神分析理論に即していえばこの時間的契機は、事後的にのみそれと知られる現実界の一瞬の開閉に相当する。

5 急き立て——結びに代えて

ラカンは1973年のセミナーで「三人の囚人」の寓話に言及して、彼らは三人いるのではない、二人と対象aとがいるのだと指摘している⁽¹⁸⁾。そして、主体は他の二人の視線の下にある対象aであり、そのかぎりでは主体は急き立てられている、と。すなわち、他の二人の眼差しのもとにのみ存在し、主体自身にとっては直接知ることのできないものが、主体にとって不可欠の真理としてあり、そのことが主体を急き立て、主体がみずから人間たちの一員として立ち上げる動因になっている、というのである⁽¹⁹⁾。たしかにこの事情は寓話のはじめから一貫して主体を方向付け、動因として働いている。論理と時間の問題との関係に即していえば、急き立て (hâte) は、それ自体としては論理の外にありながら、しかも論理にとってその可能性の条件をなすような時間的契機として機能していることになる。本稿で見てきたかぎりでは、この急き立ては自我理想の設立を促す作用として働いている⁽²⁰⁾。およそ論理が成り立つためには自我理想の位置があらかじめ設けられてあることが必要とされるのであれば、自我理想の設立を促すそのような急き立てをも視野の内に入れた超越論的論理学が成り立つと考えられる。そのような超越論的論理学、すなわち現実界への開口部としての対象aの周囲に論理的諸関係が組織される経緯にまで遡って光を当てるような論理学の可能性を後年のラカンはあれこれと模索することになるのだが、その萌芽となるような着想はすでに「三人の囚人」の寓話を思いついた時点で生じていたと考えられる。少なくとも「論理的時間」の論考が心的因果性 (la causalité psychique) をめぐるボンヌヴェルの学会発表⁽²¹⁾とほぼ同じ時期に成立しているのは理由のないことではない。自然科学的、機械的な因果性にも目的論的因果性にも回収されない、そして原因の位置にひとつの無 (rien) が口

を開けているような因果的連関——フロイトがオイディプス神話に事寄せて運命 (Schicksal) と呼んだ因果的連関——を一つの概念へと練り上げるといふ課題が「論理的時間」の論考にあっても射程に収められていることは明らかである。

註

- (1) Lacan, Jacques, *Ecrits*, Seuil 1966, pp.197-213.
- (2) エリック・ボルジュによれば、はっきりした言及だけでも1951年から1978年までの間に19回を数えると言われる。Cf. Porge, Erik, *Se compter trois – Le temps logique de Lacan*, Erès, pp.201-202.
- (3) ホップズやマルクスは双数的な二者関係 (向かい合う二人の人間、向かい合う二つの商品) を最初に呈示して、それが膠着状態に陥ることを確かめるところから出発している。ラカンの場合も同様の事情を踏まえて囚人の数を三人にしている。なお、ラカンは黒い円盤が白い円盤 (= 囚人の数) よりも一枚少ないという設定にすれば、囚人の数は三人でなくとも、それ以上であれば何人でも構わないと言っている。いずれの場合も主体は「もし自分が黒であれば」という仮定に基づいて、その場合に隣の囚人はどう考えるかと想像をめぐらせる。そうするとその想像の中に登場する隣の囚人は「もし自分が黒だとすれば、残りの囚人たちは黒二枚をみていることになる。ではその場合、自分の隣の白い円盤を張り付けられた方の囚人はどう考えるだろうか」と想像をめぐらせる。こうして想像の中で他者が想像するそのまた他者の想像が次々と重ねられて行き、それとともに想定される黒の数が増えて行く。そして最後に「黒は残り一枚しかないはずだから…」と推論することができる囚人二人に行き着く。今度はそこから「しかし相手は動こうとしない。ゆえに…」という仕方でもとに戻ってきて、最終的に「いっこうに誰も動こうとしない。ゆえにわたしは白だ」という結論が得られる、ということになる。ラカン自身も言うようにこれは机上の空論 (sophisme) でしかないが、一応の筋は通っている。
- (4) カント自身もそのことを認めている。Vgl. Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft*, B161.
- (5) Lacan, op.cit., pp.204-207. 含みの多いラカンの表現に丁寧に寄り添って紹介する余裕がないので、ここではあとの議論と密接にかかわる内容のみを提示する。
- (6) Merleau-Ponty, Maurice, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, pp.81-83
- (7) Sartre, Jean-Paul, *M. François Mauriac et la liberté*, in *Situation I*, Gallimard, 1947.
- (8) Lacan, op.cit., pp.11-61.
- (9) Lacan, *Le Séminaire Livre XIX*, Seuil, 2011.
- (10) Sartre, Jean-Paul, *La Nausée*, Gallimard, 1938.
- (11) たいていの場合、鏡を見せられた幼児はすぐに母親を振り返る。母親を振り返ることで、幼児は自我理想の位置に母親の眼差しという具体的なイメージを充填していると考えられる。そのことは発達のかなり早い時期に構造化の準備が整えられていることを示している。一方、自閉症児は鏡を見せられても母親を振り返らないと言われる。そのことは、言語が主語の入れ替えを「要請」するものであることに気づくことを困難にするような何らかの状況のうちに自閉症児が置かれていることを示唆しているのではないだろうか。
- (12) Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, A193, B238.
- (13) この点に関して興味深い振る舞いが、カントが『人倫の形而上学の基礎づけ』において定言命法を定式化する際に見られる。定言命法は明らかにカテゴリーの一覧表の諸部門 (量、質、関係、様相) に準拠して定式化されている。くわしくいえば「それが普遍的法則となることを欲しうような格率に従って行為せよ」という定式は量のカテゴリーに、「人格の内なる人間性を常に同時に目的とせよ」という定式は関係のカテゴリーに、「単に可能な目的の国の立法者の格率にしたがって行為せよ」という定式は様相のカテゴリーに対応している。けれどもここには質のカテゴリーに対応する定式が欠けている。とはいえ、それがどのようなものかを考えることは困難ではない。それは簡単に言えば「自由を実在化せよ」といった内容になるはずである。しかしカントはそれを書かず、定言命法の定式化がカテゴリーの拡大適用の試みであることも明言していない。カテゴリーの四部門とはっきり対応させて趣味判断を定式化している『判断力批判』の叙述と比べてみると、違いは歴然としている。
- (14) Kant, *Kritik der Urteilskraft*, Velix Meiner Verlag, Ph.B., SS.114-115.
- (15) Kant, op.cit., SS.200-201.
- (16) D. ヒュームに抗して自然科学に普遍的、必然的な妥当性を与えることが目指される『純粹理性批判』にあっては、ここで呼び出される理念は自然科学的・機械的な因果の系列に限られることになるけれども、それにこだわらなければ、客観的な目的論的因果性がここに呼び出されることも可能である。たとえばカントが「抑圧」したものをあからさまに扱ってみせたものがヘーゲルの『精神現象学』だということもできる。そこではカントが単なる統制的原理にとどめた目的論的因果性が客観的精神の歴史的展開の根本原理とされる。すなわち諸個体の葛藤と没落を通して客観的精神が自由を実在化する過程が世界史であるとされている。
- (17) Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, A179, B222.ff.
- (18) Lacan, *Le Séminaire Livre XX*, Seuil, 1975, p.47. ここでラカンはさらに「他の二人は二人と言うより1+aと言ったほうがよい」と続けるが、本稿ではそこ (黄金数をめぐる議論) にまで立ち入る余裕がない。
- (19) 「急ぎ立て」は引き合いに出した他の寓話たちの内でも働いている。

政治の水準であれ経済の水準であれ、社会理論の対象領野は個別的な主体の個別的な目的に向かう活動を抜きにしては成り立たない。個々の主体の目的合理的な活動はそれらの領野が自己再生産を通して存続するための原動力である。現に一つの領野が存立しているということは諸主体をそれぞれの活動へと方向付ける「急き立て」が働いているということを示している。

- (20) あらかじめ自我理想の場所が設立されていないとその法の審級としての側面も現れてくることができないという考えが、「父-の-名」の排除という精神病の定義へとラカンを導いたのかもしれない。しかしそれだけだと精神病とある種の自閉症との境界が曖昧になってしまう。実際、シュレーパー論への導入として位置づけられる1953-1954年のセミナーで取り上げられているのは自閉症児である。パラノイアの妄想が何らかの因果関係の表象と結びついていることをその特徴とするのであれば、パラノイアの問題はむしろ、そこに法が設立されるはずの「場所」が未規定的なままに開かれていることから生じていると考えられる。この点に関しては松本卓哉による「シエーマR」「シエーマI」の解釈に大いに教えられるところがあった。松本卓哉『人はみな妄想する』青土社2015参照。

- (21) Lacan, *Ecrits*, pp.151-193.